

[006]人間科学共生社会学表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/26925>

出版情報：人間科学共生社会学. 6, 2008-03-17. Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

編集後記

本号は、小川全夫教授の退任記念号であり、小川先生から直接および間接的な教えを受けたり、ともに調査研究に関わってきた関係者からの幅広い寄稿からなるものである。

小川先生の九州大学社会学研究室への貢献をいくつか挙げてみよう。第1に九州大学文学部社会学および大学院人間環境学府共生社会学コースの「国際化」に大いに貢献されたことである。現在、われわれが、海外から多くの留学生や研究生を幅広く積極的に受け入れることになった基礎は小川先生が築かれたものである。小川先生は、韓国や中国、台湾などから多くの留学生や研究生を受け入れられ、教育され、いっしょに調査研究をされるという新しい研究スタイルを根付かされた。この中から国際的に活躍する人材も輩出している。第2に「国際学術交流ネットワークの形成」に大いに貢献されたことである。韓国、中国のみならず米国の研究者とも大きな国際交流ネットワークを形成された。そして九州大学にとっての国際化のキーワードが「東アジア」にあること、そして東アジア共通の大きな社会的な課題が「高齢化」にあることをいち早く見抜いて「東アジアセンター・オン・エイジング」というユニークなリサーチコア組織を立ち上げ、九州大学の研究戦略の先鞭をつけられた。第3に「研究成果の社会への発信」を積極的に進められたことである。様々な公開講座、シンポジウムだけでなく、ハワイ大学との共同による「環太平洋のアクティブ・エイジング」などを企画・実施され、ハワイ州、ホノルル市、福岡市までも巻き込んだ「市民交流プログラム」を実現された。このような流れはさらに拡大・発展している。このように、社会学は現代社会の問題を取り上げてその解明にあたるだけでなく、研究成果をふまえた積極的な政策提言や社会貢献を求められているのだと言うことを身をもって示されたと思う。

小川先生は退任されてもますますアクティブな活動を続けておられ、あとに続くわれわれに大きな刺激と啓発のメッセージを送りつづけられている。本号の寄稿者の諸論文は、小川先生の教えがさらに多様に発展・展開していることを示すものだと考える。

(安立清史)